

# 下和白後口古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第588集

古墳時代後期の円墳2基の調査



1999

福岡市教育委員会

## 序

福岡市東区の和白地区では急速な都市化に伴い、住宅の高層化が進んでおります。1970年度に埋蔵文化財課の前身である文化課が、下和白・上和白両地区で住宅建設に伴う大規模な調査を行った時には、まだ緑が多く残る山林地帯でした。その後、福岡市の都市化とともに専用住宅の建設が相次ぎ、この10年間は共同住宅の建設が増えました。

今回の調査も高層住宅建設に伴うもので、工事立会中に2基の円墳を確認し、そのまま調査を行いました。古墳は墳丘の多くがすでになく、石室の上半部も壊されていましたが、幸い石室内からは水晶やガラス、碧玉で作られた玉類を中心とする副葬品が残され、貴重な資料を得ることができました。

今回の調査で費用負担等多くのご協力をいただいたアーサーホーム株式会社に感謝いたしますとともに、本書が市民の埋蔵文化財への理解と認識を深め、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

## 例　　言

- 1 本書は東区下和白地区における民間開発に伴い、福岡市教育委員会が平成9年度中に行った、埋蔵文化財の事前調査の報告である。
- 2 本書に掲載した写真の撮影は米倉秀紀・池田祐司が行った。
- 3 本書に掲載した遺構の実測は米倉・池田・長家伸・星野恵美が行った。
- 4 本書に掲載した遺物の実測は米倉・平川敬治・名取さつきが行った。
- 5 本書に掲載した製図は米倉が行った。
- 6 本書の遺物番号は通し番号で示し、図と図版の番号を一致させた。
- 7 本書の編集は池田の協力を得て、米倉が行った。
- 8 本書の執筆は「1 調査に至る経緯と調査組織」を池田が、他を米倉が行った。
- 9 本書に関わる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	9738	遺跡略号	SWU		
調査地地籍	東区和白丘1丁目187-1		分布地図番号	14-下和白	
開発面積	5,348m <sup>2</sup>	調査対象面積	650m <sup>2</sup>	調査実施面積	650m <sup>2</sup>
調査期間	1997年8月25日～1997年9月10日	調査担当者	米倉秀紀・池田祐司		

# 目 次

## 本文目次

序・例言	
目次	
1 調査に至る経緯と調査組織	1
2 古墳群の立地と環境	3
3 調査の記録	4
(1) 調査の経過と調査概要	4
(2) 繩文時代の遺構と遺物	5
(3) 1号墳	6
(4) 2号墳	9
4 まとめ	13

## 挿図目次

図1 下和白後口古墳群の位置と周辺主要遺跡	1
図2 調査区の位置	2
図3 調査区全体図	3
図4 SK101と繩文時代出土遺物	4
図5 1号墳墳丘土層断面図	5
図6 1号墳石室実測図	7
図7 1号墳周溝出土遺物	8
図8 1号墳石室出土遺物	9
図9 2号墳墳丘土層断面図	10
図10 2号墳石室実測図	11
図11 2号墳出土遺物	12

## 図版目次

図版1 (1) 調査区全景	(2) 繩文時代の土坑
(3) 1号墳現況	(4) 1号墳石室現況
図版2 (1) 1号墳墓道上層断面	(2) 1号墳石室水晶玉出土状況
(3) 1号墳石室	(4) 同左
図版3 (1) 1号墳石室玄門部・閉塞石	(2) 同左閉塞石撤去後
(3) 1号墳墓道貼り石	(4) 2号墳墳丘
図版4 (1) 2号墳墳丘土層断面	(2) 2号墳石室碧玉製管玉出土状況
(3) 2号墳石室(左侧壁から)	(4) 同左(奥壁から)
図版5 (1) 2号墳石室玄門部・閉塞石	(2) 同左閉塞石撤去後
(3) 2号墳墓道と玄門部	(4) 2号墳石室(光掘後)
図版6 出土遺物	
裏表紙 出土玉類	

## 1 調査に至る経緯と調査組織

平成 8 年 12 月 4 日、福岡市東区和白丘 1 丁目 187 番 1 における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願がアーサーホーム株式会社から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は埋蔵文化財の分布は知られていなかったが、山林で旧地形が残っており、わずかながら古墳状の高まりが見られた。このため、埋蔵文化財課は平成 8 年 12 月 12 日、高まり部分について試掘調査を実施した。試掘調査では人為的な地形の変更は見られたが、古墳は確認することができず、また戦時に手を入れたと言う伝聞もあって、本調査には至らなかった。ただし、部分的な試掘であったため、造成時に立会し再確認することとした。

平成 9 年 8 月 22 日、申請地の樹木伐採後、造成を行うとの連絡を受けた埋蔵文化財課は工事立会を行い、高まり部分に古墳の石室を確認した。このため、造成を一時中断し、申請者との間で協議をもち、記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査では 2 基の古墳を確認し、平成 9 年 8 月 25 日から同年 9 月 10 日まで行った。

### 調査組織

調査委託 アーサーホーム株式会社

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課



1. 三苦遺跡群
2. 永浦遺跡
3. 下和白遺跡群
4. 飛山古墳群
5. 奈多砂丘 B 遺跡
6. 海の中道遺跡
7. 志賀島遺跡群
8. 上和白遺跡群
9. 唐原遺跡
10. 香住ヶ丘古墳
11. 名島古墳
12. 善松原古墳
13. 立花山城
14. 城ノ越城
15. 名島城
16. 香椎 A 遺跡
17. 香椎 B 遺跡
18. 蒲田部木原遺跡群
19. 江辻遺跡
20. 戸原麦屋遺跡
21. 多々良込田遺跡
22. 箱崎遺跡
23. 鹿部山遺跡
24. 三代貝塚
25. 夜白三代地区遺跡群
26. 下和白後口古墳群

図 1 下和白後口古墳群の位置と周辺主要遺跡

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（前任）柳田純孝（現任）

第2係長 山口譲治

調査担当 米倉秀紀・池田祐司

庶務担当 朝原千昌（前任）木原淳二（現任）

調査協力 長家伸・星野恵美（埋蔵文化財課）

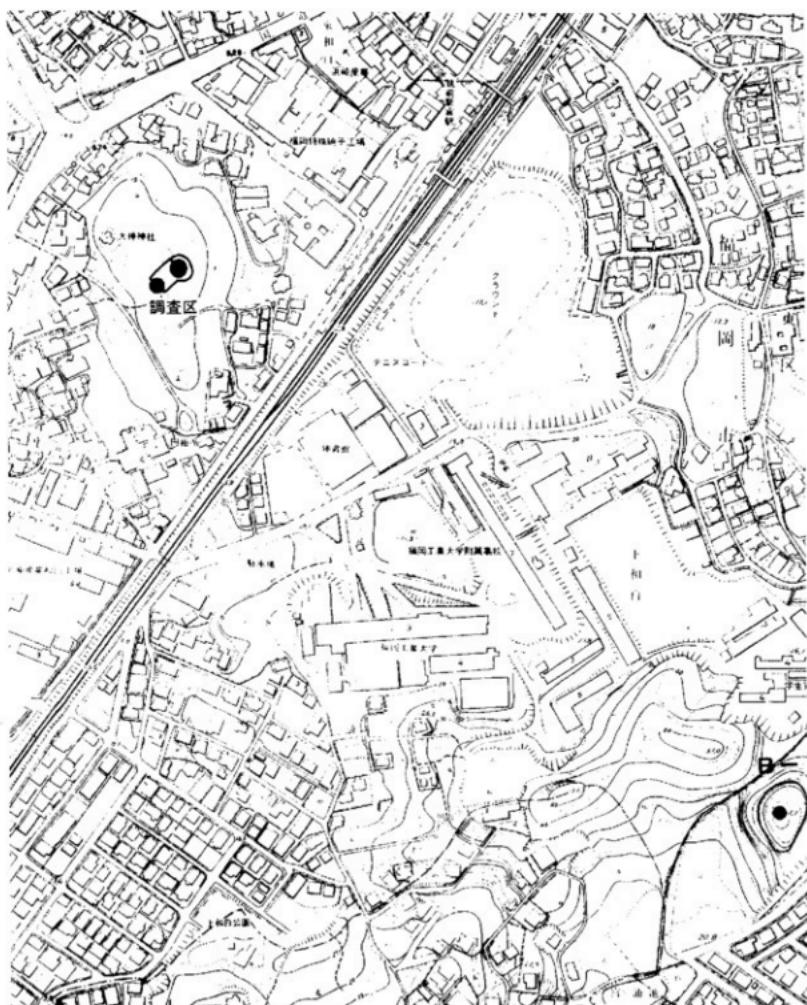


図2 調査区の位置

## 2 古墳群の立地と環境

下和白後口古墳群は、福岡市東区和白丘1丁目187番1に所在する。当地は行政区画では福岡市の北端部に位置し、旧行政区画では粕屋郡和白村である。

遺跡の北側前面には新宮～勝浦平野が広がり、背後は立花山、三郡山塊に囲まれ、西には海の中道

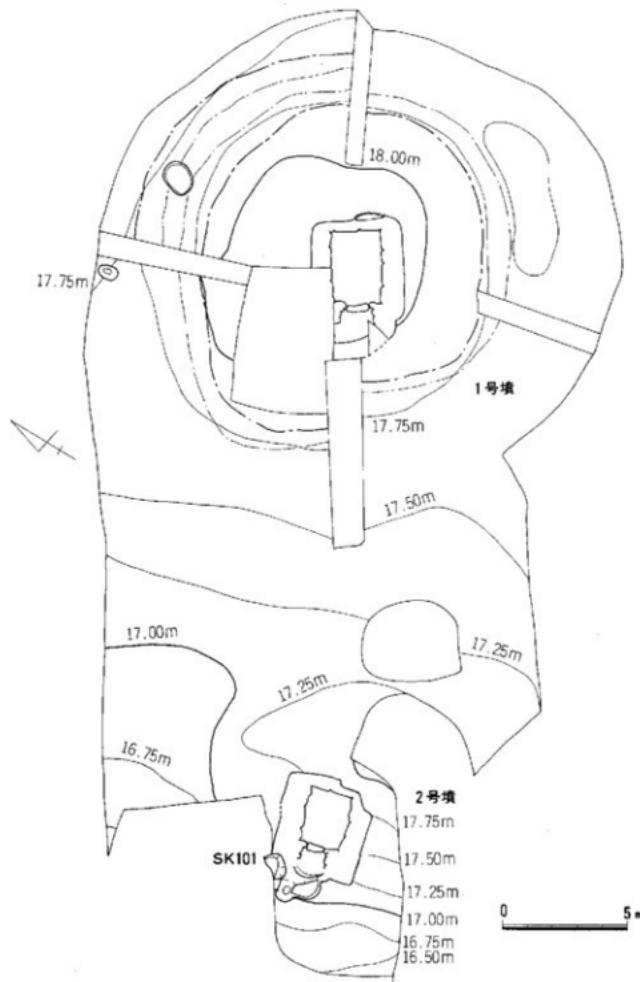


図3 調査区全体図

が延びている。遺跡はそれらに囲まれた第三紀層の低平な丘陵上にある。丘陵は樹枝状に解析され、狹長な谷が奥まで侵入している。当古墳群はそれらの舌状に残った丘陵の中央付近に築造されている。

当古墳群周辺は、福岡市内でも比較的早くから調査が行われた地域のひとつである。1970年には和白地区区画整理事業に伴い、飛山古墳群が調査され、竪穴系横口式石室や小竪穴式石室を内部主体にもつ古墳が発見されている。当古墳群と比較的近いタイプの石室である。この事業では他にも弥生時代の遺構が和白遺跡で発見されている。1989年には三苦吉原古墳が調査された。長い羨道部をもつ横穴式石室から馬具や三環頭の太刀飾りなどが出土している。当地の東側に位置する新宮町下府では人丸古墳の調査が行われ、組み合わせ式箱形石棺を内部主体にもつ円墳が発掘され、銅鏡や琴柱形石製品などが出土している。以上、この地の古墳群を見ると、10m内外の小円墳から比較的豊富な副葬品が出土している。

### 3 調査の記録

#### (1) 調査の経過と調査概要

発掘調査は平成9年8月25日に開始した。調査前は前述のように、墳丘はほとんど遺存せず、石室もほぼ完全に埋もれていた。工事中に古墳を発見したため、調査開始時には残存していたわずかな墳丘も保存樹木部分を除いて削平されていた。そのため、一部を除いて地山面まで下げるを得なかつた。従って2基とも墳丘の土層断面を取り得たのは1ヶ所のみである。石室も盜掘を受けていたが、予想以上に遺物が残存していた。また1号墳の保存樹木部分から須恵器の甕などが出土したが、すべてを掘り出すことはできなかつた。

古墳2基以外には、縄文時代と考えられる上坑1基とピット1つを検出し、墳丘内などから縄文時代遺物が出土した。調査は9月10日に終了した。

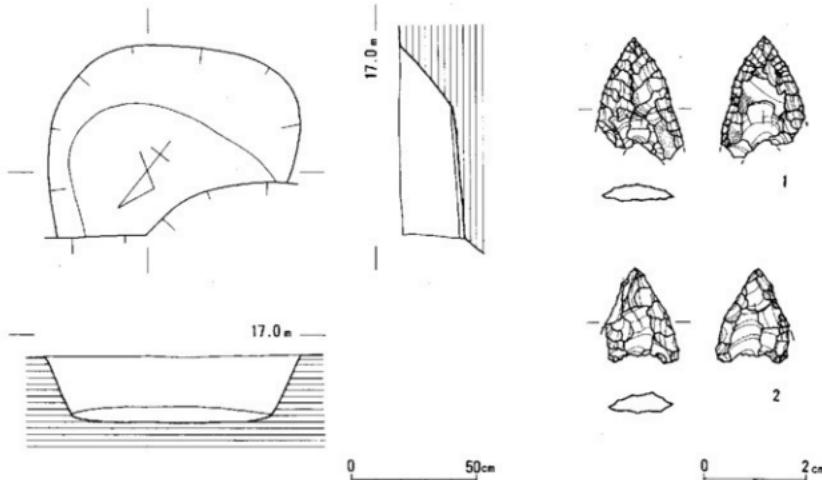


図4 SK101と縄文時代出土遺物

## (2) 繩文時代の遺構と遺物

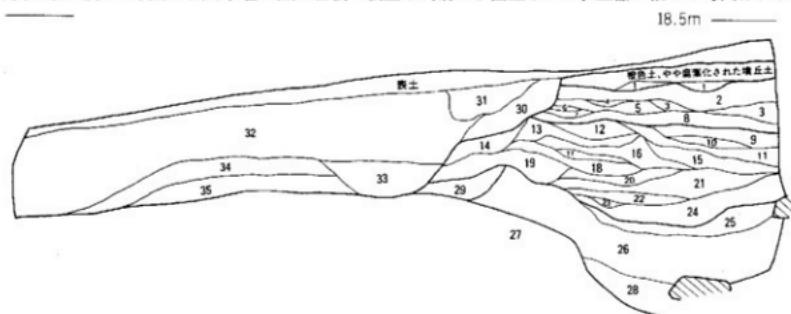
縄文時代と考えられる遺構は2号墳北側で検出した土坑1基である。またピットもこの時代の可能性があるが、出土遺物がないため不明である。

### SK101(図4)

2号墳北側で、地山面の清掃中に検出した。半分以上を攪乱によって切られている。現状の平面形は半月形を呈し、長さ1.33mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ36cmを測る。覆土は汚れた地山色である赤色の頁岩風化土である。覆土から微細な土器片と黒曜石数点が出土した。

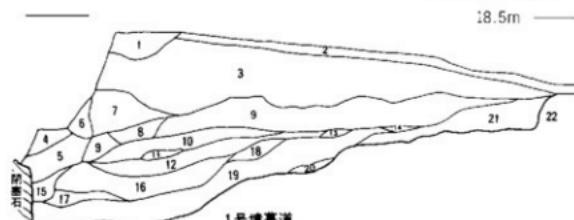
### 出土縄文時代遺物

縄文土器の微細な破片数点と黒曜石のフレイク・チップ合わせて約20点、石鏃3点、使用痕ある剥片及び加工痕ある剥片の断片、各1点が古墳の墳丘や周溝から出土したが、土器の細かな時代はわから



1号墳西側墳丘

- |                  |                   |                     |                  |
|------------------|-------------------|---------------------|------------------|
| 1.赤褐色土           | 10.明黄褐色土          | 19.黒色土              | 29.黄褐色土          |
| 2.明黄褐色土          | 11.3に同じ           | 20.褐褐色土             | 30.黄褐色土に淡黄色土ブロック |
| 3.赤褐色土に明黄褐色土少量含む | 12.3より明黄褐色土多く含む   | 21.3に同じ             | が少量化入る           |
| む                | 13.淡黄褐色土          | 22.黒色土              | 31.赤褐色土(標により異風)  |
| 4.黒色土            | 14.明黄褐色土に淡黄褐色土、赤色 | 23.淡黄褐色土            | 32.褐色土           |
| 5.明黄褐色土          | 土色む               | 24.3に同じ             | 33.褐色土に淡黄褐色土入る   |
| 6.淡黄褐色土          | 15.明黄褐色土          | 25.黒色土              | 34.赤色土           |
| 7.淡黄褐色土          | 16.3に同じ           | 26.3に同じ(淡黄褐色土上やや多い) | 35.黒色土(田字)       |
| 8.明黄褐色土          | 17.黒色土            | 27.褐色土(赤色)          |                  |
| 9.3に同じ           | 18.3に同じ           | 28.3より明黄褐色土かなり多い    |                  |



1号墳高道

- |                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| 1.本土、赤褐色土(黄土ブロック)   | 13.茶色粒上                |
| 2.土上                | 14. "                  |
| 3.赤褐色土              | 15.茶色土(しまりなし)          |
| 4.赤褐色土+黄褐色土         | 16.黄褐色土(茶色粒土ブロック多し)    |
| 5.淡黄褐色土             | 17.黄褐色土                |
| 6.黄褐色土(わずかに灰がまざる)   | 18.黄褐色土上               |
| 7.黄褐色土(やや緑い)多い      | 19.赤褐色土(黄褐色土多く含む)      |
| 8. "                | 20.黄褐色土に黑色土            |
| 9.茶褐色土、質色がかり明るい赤色粒  | 21.赤褐色土(黄土ブロックがわずかにある) |
| 10.灰色がかった黄褐色土(小赤色粒) | 22.淡黄褐色土               |
| 11.茶色土              |                        |
| 12.黄褐色土、赤色土粒多い      |                        |

図5 1号墳墳丘土層断面図

らない。これらのうち実測可能な遺物は、石鏡 2 点である。1 は漆黒の黒曜石製で、両脚部を欠失する。現存長 2 cm、幅 1.7 cm、厚さ 3 mm を測る。縦長の剥片を利用していると考えられ、主要剥離面側は周縁部のみに細かな調整を施し、裏面は全体に細かな調整を施している。2 は黒曜石製で、全面風化のため一見安山岩のような色を呈しているが、新しい割れ口を見ると、漆黒の黒曜石である。長さ 2 cm、幅 1.4 cm、厚さ 4 mm を測る。基部の抉りは浅く、全体の調整も粗い。

### (3) 1号墳 (SO001)

#### ① 墳丘

径 13 m 前後を測る円墳で、残存部分の墳丘高約 1 m を測る。墳丘頂部の盛土が周囲に流れて現状はわずかに古墳中央が高くなっているだけである。墳丘北側で幅 2 ~ 2.5 m、深さ約 30 cm の周溝を確認したが、南半では検出できなかった。墳丘の構築は、石室掘方を掘った後に、地山面上で若干の盛土を行い、墳丘外周に土堤を先に造り、その後その土堤の中に土を充填・版築している。その上にもう一度土堤状の盛土を行い、この作業を数回くり返していると思われる。版築はかなり細かい。盛土のほとんどが地山の土の黄色土と赤色土である。

#### ② 主体部

主体部はいわゆる豊穴系横口式石室に近い石室である。玄室の長さは左壁 2.79 m、右壁 2.95 m、中央の最長部で 3.05 m、幅は奥壁 1.92 m、玄門部 1.86 m、中央の最長部で 2 m を測り、長方形に近い羽子板プランになっている。壁面の残存高は約 80 cm を測り、壁面は 3 ~ 4 段が遺存している。両側壁 1 段目はやや大振りな 4 石で構成され、2 段目以上はやや小振りな石を中心構築している。奥壁は 1 段目の 2 石のみ遺存しているが、この 2 石は高さがまったく異なっている。現存している部分では、控え積みはほとんどなされていない。床面には長さ 10 cm 前後の角礫を中心に敷石が施されている。玄門は高さ約 60 cm、幅約 50 cm、厚さ 30 cm の扁平な石を両側に立てて両袖としている。さらにその上に数石載る可能性もある。幅約 30 cm、床面からの高さ 15 cm の樋石を挟んで墓道に移行する。墓道は長さ 0.9 m、幅 1.3 m の壁面部分、その先の長さ 1.1 m の斜めに立ち上がる部分から成っている。壁面部分は墓道の立ち上がりに礫を貼り付けるように造られており、2 列 3 段が遺存している。構造的に考えて、ここには天井は横架していなかったものと思われる。また樋石に接して高さ 40 cm、幅 45 cm、厚さ 10 cm の板状の閉塞石が立っている。

#### ③ 出土遺物

出土した遺物は、墳裾から出土した土器類、石室から出土した玉類、排土中から出土した玉類と鉄器があるが、排土中から出土した遺物は石室内にあったものと考えられる。

#### 墳丘出土遺物（図 7）

石室入り口方向を向いて、北側周溝部と石室左側の墳裾からまとまって遺物が出土したが、前述のとおり、保存樹があるため、すべての遺物を掘り出すことができなかった。出土遺物の大半は須恵器で、若干の土師器片が含まれていた。以下、図示し得たのは須恵器のみである。

3 ~ 5 は壺蓋である。3 は口径 15 cm、器高 3.8 cm、4 は口径 12.4 cm、器高 4 cm、5 は口径 14 cm、器高 3.8 cm を測る。4 は天井部がやや丸みを帯びているに対し、3・5 は天井部がほぼ平坦である。3・4 には天井部にヘラ記号がある。6 ~ 10 は壺の身で、6 は受け部は先端が尖り気味で、底部にはヘラ記号がある。6 は口径 11.8 cm、器高 3.2 cm、7 は口径 12 cm、推定器高約 4 cm を測る。ともに受け部は短く、底部は平坦になるとされる。8 ~ 10 は口縁部片で、いずれも 6・7 より受け部が長い。11・13・14 は高壺で、11 は口径 10.8 cm、残存器高 13 cm を測る。口縁部は垂直近く立ち上がり、体部中

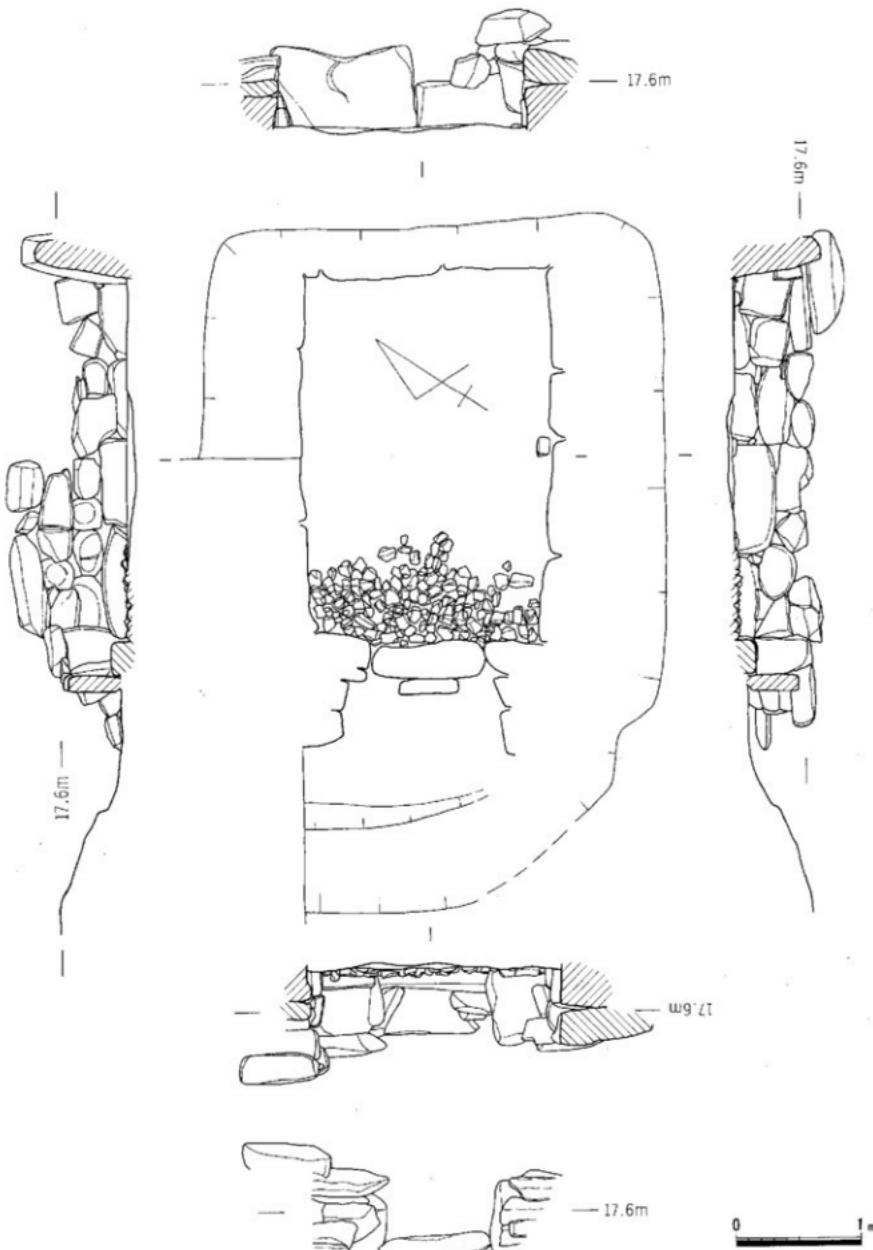


図6 1号墳石室実測図

央に沈線を3条、下部に1条施している。脚部外面にはしづらの痕跡が螺旋状に残存している。13は脚裾部径10.2cmを測る。脚上部外面にはカキ目状の調整が施されている。14は脚裾部径13.4cmを測る。全面回転ナデで仕上げている。12は腹で、胴部最大径9.7cmを測る。器壁は厚く、胴部は丸い。胴部最大径のやや上に径1.3cmの穿孔が施されている。15は腰の口縁部片で、口径46cmを測る。口縁端は折り曲げている。外面にヨコナデを施した後、斜方向に櫛歯状の調整具で調整を施している。内面はヨコナデである。

#### 石室出土遺物（図8）

石室内からは玉類と鉄製品が出土したが、いずれも原位置を保っていない。

#### 玉類

20点出土した。水晶製が1点、径1cm近いガラス製が15点、径3mm前後のガラス製が4点である。16は水晶製の玉で、わずかに欠失している。切子玉に全形は似るが、体部に面はなく横断面は丸い。長さ1.7cm、最大径1.5cmを測る。風化のためか透明度はかなり低い。17～35はガラス製の小玉で、径

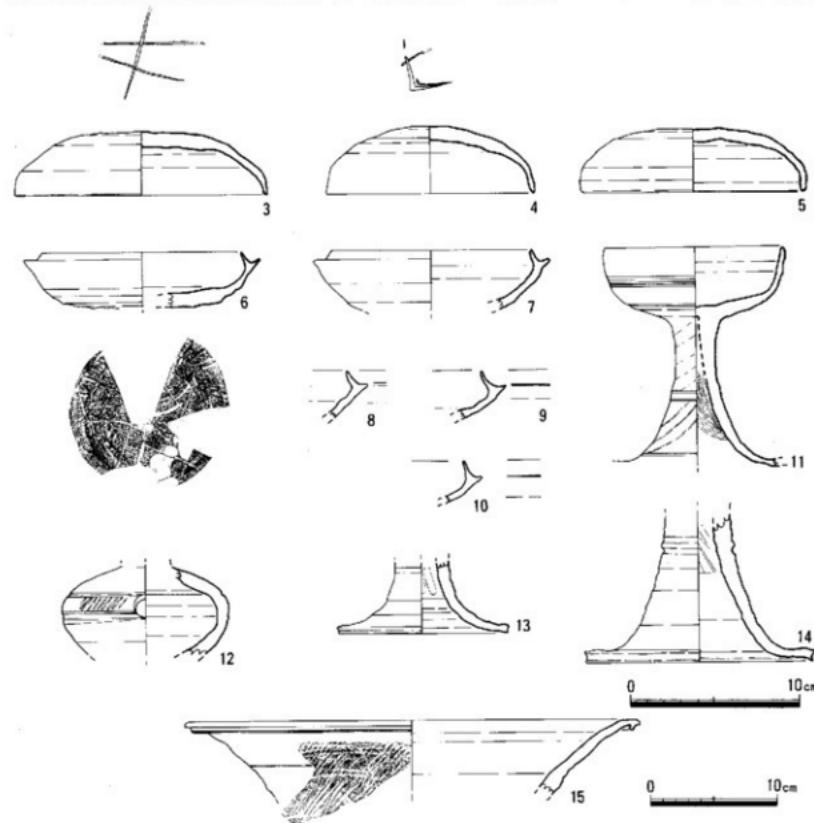


図7 1号墳周溝出土遺物

1cm近い大形の玉と、径5mm前後の小型の玉に分けられる。前者は透明感の強い緑色を呈しているもので、一連のガラス玉と思われる。切断面はよく磨かれている。直徑8~10mm、厚さ4~7mmを測る。後者は透明感のあまりない、淡い緑色を呈している。最大径3mm前後、厚さ2mm前後と小さい。切断面はあまり磨かれていないようであるが、小さいため磨くのも難しいのであろう。

#### 鉄製品

36は鉄刀の鞘尻金具である。長さ4.7cm、幅1.8cm、高さ3cmを測る。断面形は卵形を呈し、壁厚2mmを測る。内面にわずかに鞘の木質が残っている。

#### (4) 2号墳 (SO002)

##### ① 墳丘

古墳の東側半分は1mほど墳丘が残存していたが、西半はすでに削られてほとんど遺存していない。東半も含めて周溝は明確には確認できなかったが、東側はわずかに周溝状の痕跡をとどめている。墳丘の大きさも明確ではないが、概ね10m前後と考えられる。墳丘の構築は1号墳と同様に、まず地山面（旧表土）上に若干の盛土を行う。ただし1号墳では明確に確認できなかったが、2号墳では旧表土が遺存している。その後、墳丘外周に土堤を先に造り、その後土堤の中に土を充填している。版築はかなり細かい。盛土のほとんどが地山の土の黄色土と赤色土である。

##### ② 主体部

主体部は1号墳と同じ穴式横口式石室である。玄室の長さは左壁約2.14m、右壁2.14m、中央部の最長部で2.16m、幅は奥壁部で1.68m、中央で最大幅1.82m、玄門部で1.5mを測る。単純に数字だけ追うと三昧線胴張りタイプであるが、むしろ見た目は羽子板プランに近い印象を受けれる。石室の壁の残存高は1.25mを測る。側壁は3~5段、奥壁は2~3段が遺存している。右の積み

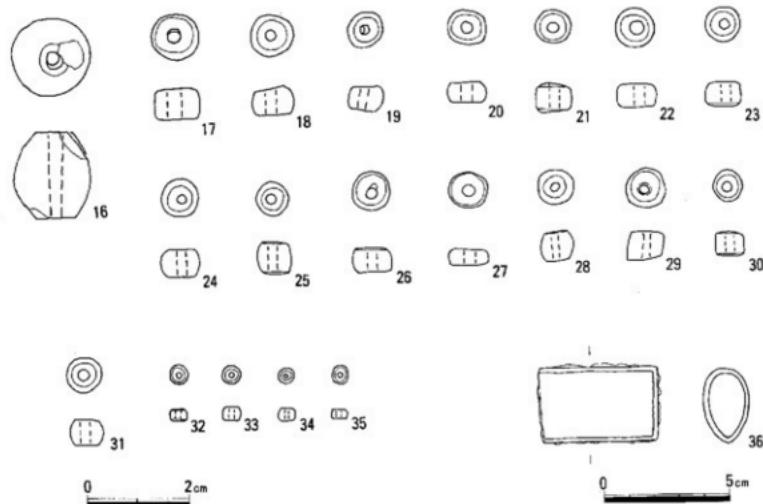


図8 1号墳石室出土遺物

方は1号墳とほぼ同様で、両側壁1段目はやや大振りな3石で構成され、2段目以上は小振りな石を中心構築している。奥壁は1段目が大きな2石で構成され、その上に小振りで扁平な石を積んでいる。床面には1号墳よりやや大振りな石（長さ15~20cm前後の角礫）を中心に敷石が施されている。玄門は高さ70cm、幅50cm前後、厚さ20cmの扁平な石を立てて両袖としている。幅30cm、床面からの高さ15cmの樋石を挟んで墓道に移行する。墓道は長さ0.6m、幅0.95mの壁面部分、その先の長さ1.3mの斜めに立ち上がる部分から成っている。墓道の壁面は3列2段が遺存している。壁面は1号墳と同様、墓道立ち上がりに礪を貼りつけている。また樋石に接して1号墳と同規模の板状の閉塞石が立っていたが、閉塞石は玄室に向かってすでに斜めに倒れていた。閉塞石の墓道側には、閉塞石を押さえるようにその下部に長さ20~30cm前後、厚さ10~20cm前後の塊石が置かれていた。

### ③ 出土遺物（図11）

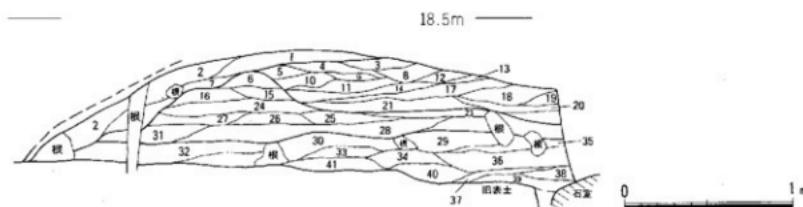
いずれも石室あるいは、墓道からの出土で、須恵器2点が墓道から出土した以外はすべて玄室内からの出土である。玄門寄りの北東隅から鉄製品（ほとんどは鉄鎌）が多く出土し、南東隅からも若干の鉄製品が出土した。管玉・ガラス小玉は玄室中央付近から出土した。これらの遺物は床面近くから出土しているが、かなり散漫で、向きが不統一な状態で出土していることから、原位置にあったものは少ないと考えられる。

#### 鉄製品

37~54は鉄鎌で、完形品はない。先端部分の破片もほとんどなく、全形はわからない。断面形は長方形を呈するものがほとんどである。本質が遺存しているものも若干ある。55~56は鉄製刀子片と思われる。55は身幅2cm、56は1.5cmを測る。57は岡の上側と左側が欠損しているため明瞭ではないが、端部を折り返しており、鉄鎌と思われる。

#### 玉類

58~63は管玉である。58~61は深緑色の碧玉製である。ていねいに磨かれており、碧玉の綺模様がきれいに見える。長さ2~2.5cm、径8~10mmを測る。孔は片側からの穿孔で、片側は3mm前後の孔だが、反対側は1mmもない。62は58~61に比べ、緑色がかなり薄い。材質は不明であるが、碧玉に近い石材である。孔は大きく、上から下まで4mmを測る。63は灰色がかった緑色の石材を利用している。片岩か。長さ2cm、径9.5mmを測る。両側からの穿孔である。64~72はガラス小玉で、人形品と小型品に分けられる。64~67は小形のガラス玉である。64は透明感のやや高い水色に近い色で、直径5mm、厚さ5mmを測る。65は紺色に近い。直径・厚さともに4mmである。66は淡い緑色で、径3mm、厚さ2



2号墳東側埴丘土層断面図

- |                    |                      |                |                     |
|--------------------|----------------------|----------------|---------------------|
| 1.赤色土にごく少額の淡黄色土    | 13.赤色土               | 24.白色土+淡黃色土    | 33.灰青褐色土            |
| 2.赤褐色土             | 14.赤色土               | 25.淡黄色土に赤色土まじる | 34.にない灰褐色土          |
| 3.赤褐色土に淡黄色土ブロックまじる | 15.にない黄褐色土に赤色土まじる    | 26.赤褐色土に赤色土まじる | 35.にない灰褐色土          |
| 4.赤褐色土に赤色土ブロックまじる  | 16.赤褐色土に淡黄色土ブロックまじる  | 27.赤褐色土に赤色土まじる | 36.赤褐色土に赤褐色土        |
| 5.赤褐色土             | 17.赤褐色土に赤色土まじる       | 28.赤褐色土に赤色土まじる | 37.にない赤褐色土に赤褐色土ブロック |
| 6.赤色土              | 18.赤褐色土に淡黄色土まじる      | 29.赤褐色土に赤色土まじる | 38.赤褐色土             |
| 7.6.7.9.10.赤褐色土    | 19.赤色土               | 30.にない赤褐色土     | 39.30.にない黄褐色土       |
| 8.3.9.10.赤褐色土      | 20.赤褐色土-灰白土上+にない黄褐色土 | 31.赤色土         | 40.31.にない黄褐色土       |
| 9.やや赤褐色土           | 21.赤褐色土にごく少額の赤色土をわずか | 32.赤色土         | 41.22.にない黄褐色土       |
| 10.灰褐色土            | 22.赤褐色土に淡黄色土まじえる     | 33.にない黄褐色土     | 42.23.にない黄褐色土       |
| 11.淡黄色土に赤色土まじる     | 23.赤褐色土に淡黄色土まじえる     |                |                     |
| 12.淡黄色土            |                      |                |                     |

図9 2号墳埴丘土層断面図

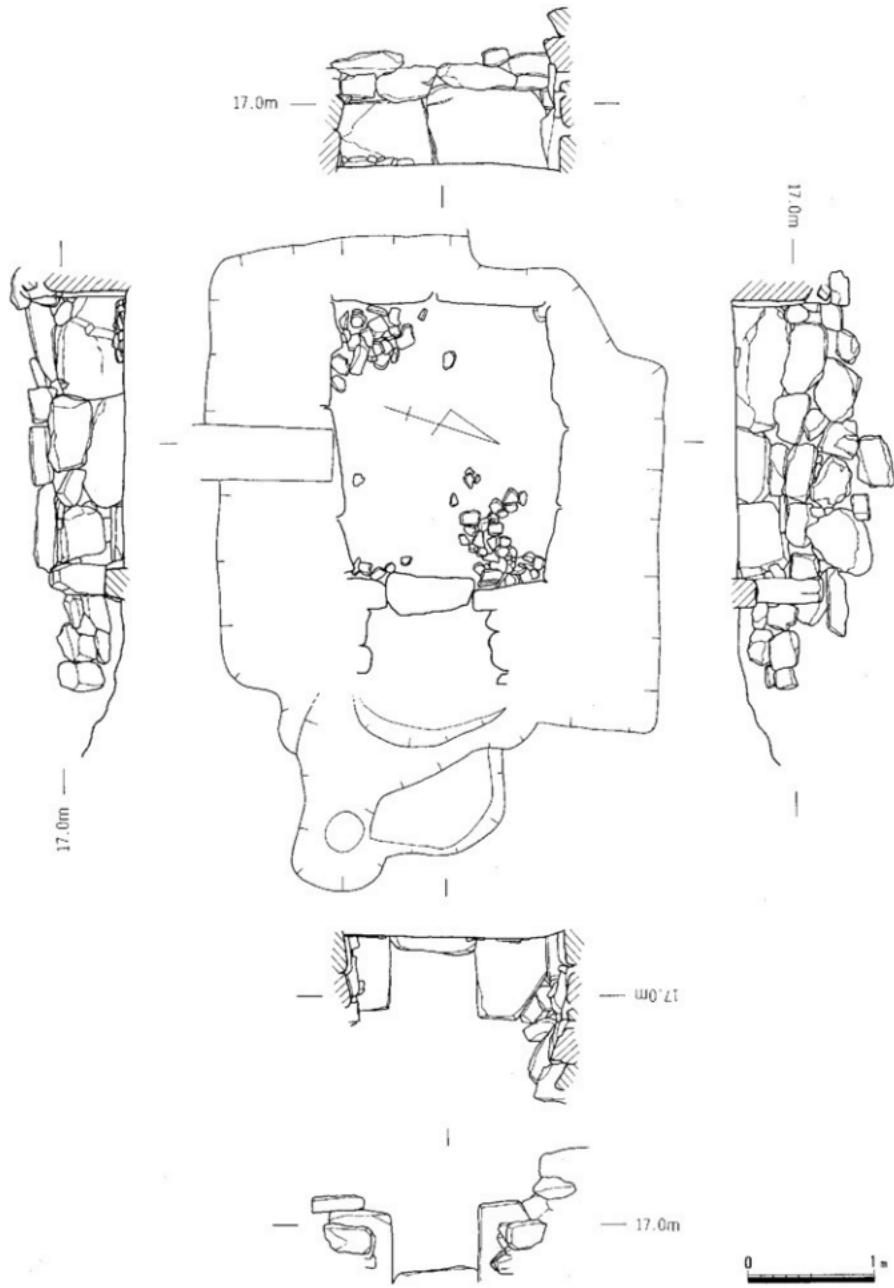
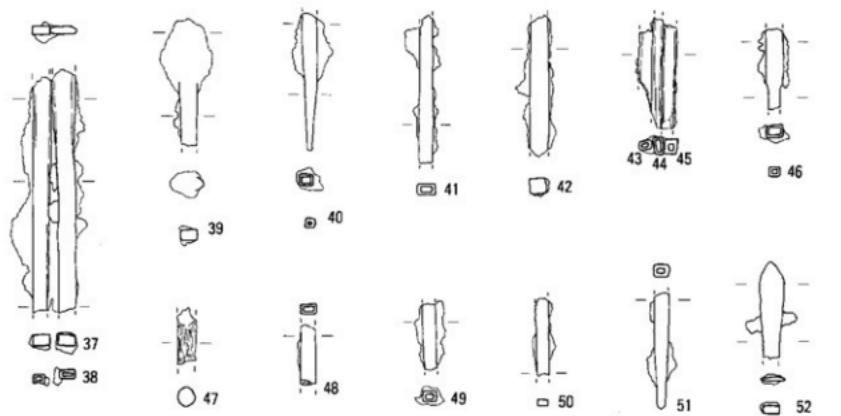
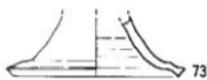
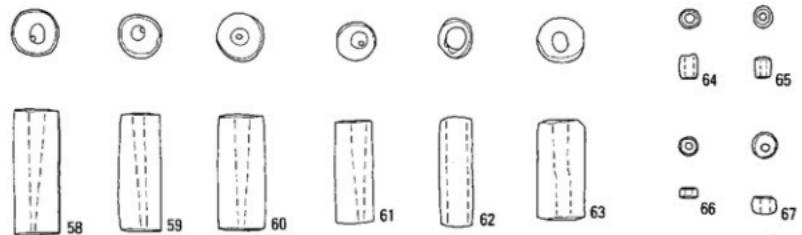


图10 2号填石室实测图



0 5 cm



0 2 cm

0 10 cm

图11 2号填出土遗物

mm。67は濃い紺色で、直径5mm、厚さ3mmを測る。68～70は土玉で、直径8mm、厚さ6mmを測る。71は紺色のガラス玉で、直径7.5mm、厚さ6mmを測る。

#### 須恵器

72と73は2号墳墓道から出土した須恵器で、2号墳から出土した土器はこれだけである。72は壺蓋で、推定口径12.8cm、推定器高4cmを測る。口縁部と体部の境の段はしっかりとし、口縁部は比較的長い。74は高壺の脚部で、幅径10.6cmを測る。全面回転ナデで仕上げている。

## 4 まとめ

紙数の関係上、石室の形態と時期にしぼってまとめる。2基の古墳は概ね同じ石室形態を成している。本文中ではその形態について「堅穴系横口式石室に近い」形態とした。その特徴を列挙すると、

①玄室は長方形に近い羽子板プランで、その長幅比を土井氏が行った方法（左側長+右側長/奥幅+前幅）で計算すると、1号墳が1.52：1、2号墳が1.22：1を測る。

②わずかに上部の石より大きい石を腰石とし、腰石より上は塊石積みである。

③玄室と墓道の間は袖石と樋石がある。

④明確な羨道部ではなく、玄室前の墓道の玄室より1m未満の長さの両側に躰を貼りつけている。

⑤閉塞は板石で成し、2号墳ではその背後に若干の塊石を置いている。

⑥墓道は斜めに上がっている。

以上の特徴を、土井氏の分類<sup>①</sup>に当てはめると、北部九州型石室B類にあてはまる。ただ土井氏は幅1.9m以上を同A類としているが、1号石室は幅2m近くあるものの、総合的に評価すれば、B類として良いであろう。他の研究者の近年の論を見ても、1号・2号ともに北部九州型横穴式石室とするに異存ないであろう。ただし本文中で「堅穴系横口式石室に近い」形態としたように、墓道部の構造はまさしく堅穴系横口式石室に近い形態を呈している。

両古墳の時期について、まず出土須恵器を見ると、1号墳周溝から出土した須恵器は、壺蓋が口縁部が短く口縁部と体部の境が明瞭ではない。壺身は口径が12cm前後、器高3～4cmで、受け部が短い。これらの特徴は須恵器九州編年の中Ⅲ期後半の様相を示している。また高壺や壺の破片などの様相も同じである。一方2号墳出土の壺蓋は破片ではあるが、口縁部と体部の境は明瞭で、沈線が巡っている。破片のためや明瞭さに欠けるが、ⅢA期に入れてもおかしくないものと思われる。出土須恵器からは2号墳が6世紀後半前葉、1号墳が同後葉頃を示しているが、追葬の可能性もあり、何とも言えない。一方石室形態を見ると、1号墳は2号墳より1回り大きく、長幅比は2号墳より長い。腰石は2号墳の方が大きく、墓道の貼り石も2号墳の方が1号墳より長くしっかりしている。強いて言えば2号墳の方が新しい様相と言える。ただこれらの構造的な差は小さく、前述のように大きな差はない。この種の形態の石室は、羨道部を有する横穴式石室に近く、ほとんどすべてが有羨道石室に変わる6世紀後半前葉以前と言える。また堅穴系横口式石室に近い形態からそれに後続する形態と考えるならば、6世紀中頃以降となり、あるいはこの2点をそのまま当てはめると、2号墳で出土した須恵器に近い時期の可能性が高いと考えられる。

#### 注

① 土井基司「堅穴系横口式石室小考」『岡山大学構内遺跡調査研究年報6』1989 岡山大学

② 蒲原宏行「堅穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』1983 雄山閣出版



(1) 調査区全景



(2) 縄文時代の土坑



(4) 1号墳石室現況



(3) 1号墳現況



(2) 1号墳石室水晶玉出土状況



(4) 同上



(1) 1号墳墓道土層断面



(3) 1号墳石室

図版 3



(2) 同左 開塞石撤去後



(4) 2号埴輪丘



(1) 1号埴輪玄門部・閉塞石



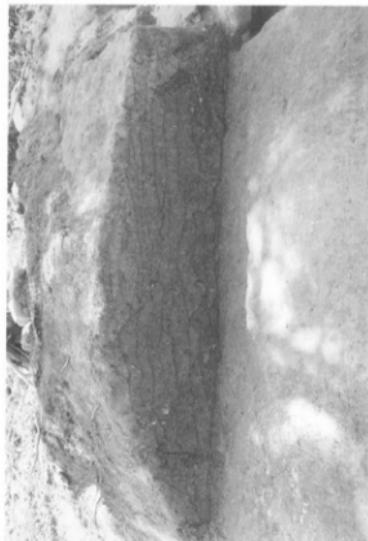
(3) 1号埴輪道端石



(1) 2号墳石室土層断面



(2) 2号墳石室碧玉製管玉出土状況



(3) 2号墳石室（左側壁から）



(4) 同左（奥壁から）



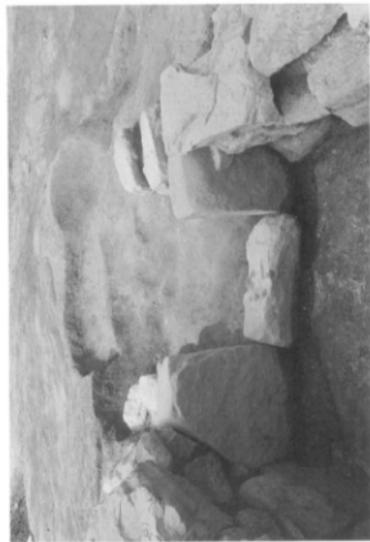
(2) 向左 附塞石撤去後



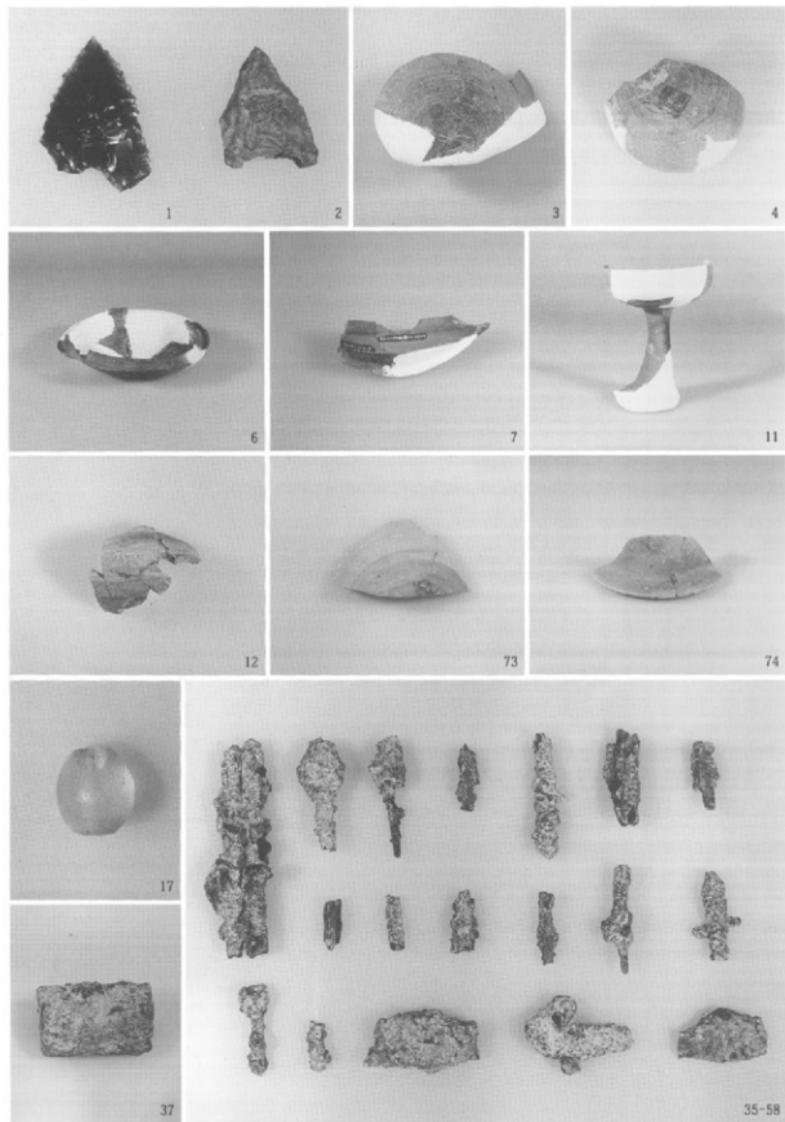
(4) 2号墳石室(完掘後)



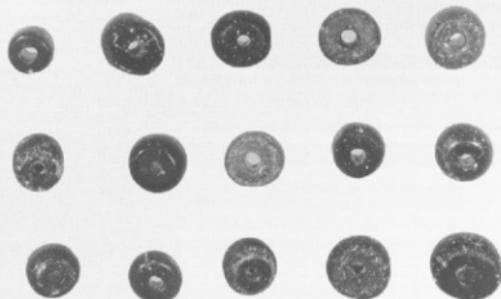
(1) 2号墳石室玄門部・閉塞石



(3) 2号墳墓道玄門部



出土遺物



1号出土ガラス玉



2号出土管玉

出土玉類

## 下和白後口古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第588集

1999年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 三協舍印刷所